



いとう



海援隊旗(二曳きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

烏 兎 UTO SOUSOU 忽 忽

明けましておめでとうございます

ここは館長の部屋

新年のご挨拶

昨年は、坂本龍馬が土佐藩を脱藩した文久2年から数えて160年目の年に当たりましたので、令和4年度の企画展は、「龍馬脱藩160年維新へつながる土佐の道」展でスタートしました。

同展では、龍馬脱藩の道をはじめ、土佐藩の人々が通った道にも注目して、脱藩という非公式のルートのみならず、参勤交代や四国遍路のルートも合わせて取り上げました。

龍馬脱藩の前後における幕末の同志たちとの交流の記録などから、誰と交わり、何故脱藩に至ったのか、脱藩の難しさや、どの道を通ったのかを考察しました。加えて、参勤交代や四国遍路のための主要道とその道路事情をはじめ、往来時の様子や慣行、旅人たちの思いなどにも考察を巡らしながら、江戸期の土佐の道を幅広く紹介しました。

「龍馬脱藩160年維新へつながる土佐の道」展の担当学芸員の役割は、現龍谷大学文学部特任講師の高山嘉明氏に担っていただきました。高山氏にお願いしたのは固有の専門的技法を大いに発揮してください、当館学芸員としての有終の美を飾るにふさわしい企画展の公開となりました。あらためて高山氏に深

い感謝の意を表させていただきます。

さて、年が明けた令和5年の3月には、桂浜公園商業エリアのグランドオープンが予定されています。高知の歴史を紹介する「桂浜ミュージアム」などが追加的に整備されるとのことです。で、「食・歴史・自然体験観光」の幅と厚みの増す桂浜に、ぜひ多くの皆様にお出でをいただきたいと思っています。さらに4月からは、牧野富太郎博士をモデルとした朝の連続テレビ小説「らんまん」の放送が始まります。

当館におきましても、こうした桂浜公園の一新とドラマの放送という時流を生かした企画を立てて、令和5年度の企画展のスタートを切りたいと考えています。

企画展のテーマは、「浦戸湾・歴史探訪」と「桂浜・坂本龍馬像」の2つです。歴史探訪では桂浜の渚公園全体のリニューアル完了を機に、龍馬も赴いた桂浜や浦戸湾の歴史を幕末



の絵巻物や絵画を交えて紹介し、龍馬像では高知の青年たちによる昭和3年の建立物語を紹介する企画を進めています。この取り組みを通じまして、当館を入口とした県内各地域への送客にもつなげ、高知観光全体の賑わいづくりに貢献していかねればと考えています。

吉村大

勝海舟生誕二百年記念の特別展を開催(2月16日〜4月16日)

龍馬を世の中に押し出した恩師・勝海舟と海舟と龍馬の係わりを探る

本年度(令和4年度、2022年)は、龍馬脱藩160年の企画展で幕を開けた。文久2(1862)年3月24日に高知城下を出て、国を抜けていった龍馬は、そのとき何を考えていたのか。脱藩の目的は何で、未来をどう描いていたのか。龍馬自身まだ掴みきれていなかったように見える。同展は脱藩後暗殺まで5年半の龍馬の動きを探る余韻を残した。

2回目の企画展では龍馬幼少期7歳のころの土佐を回顧し、昨年11月からは3回目の企画展「龍馬最後の帰郷」を1月25日まで開催している。

勝海舟と龍馬の出会い

いよいよ、本年度最後の展示。特別展「龍馬の師―勝海舟生誕二百年」が2月から始まる。

脱藩後の龍馬は人生の師ともいえる幕臣・勝海舟に出会ったことで、「国のため天下のため力を尽くす」ことへ動いていく。脱藩した文久2年の暮れに龍馬は海舟と出会ったようであるが、海舟に初めて会った日の明確な記録はない。同年12月29日の海舟の日記に、「千葉重太郎来る。同時、坂本龍馬子来る。京師の事を聞く」と、龍馬の名前が出てくる。この日は大晦日である。当時海舟は兵庫におり、龍馬から京都事情を聞いた後、誰かに書付を渡すよう龍馬へ託した。海舟の指示で、翌元日から龍馬は大坂・京都へと赴くのである。



海舟に龍馬が面談したきっかけは、松平春嶽(越前福井16代藩主)の紹介によるという記述が残る。脱藩した龍馬は京阪で聞いた海舟の唱える開国論に息巻き、直談判で江戸藩邸にいる春嶽に海舟への紹介を求めたという。

直接、海舟に面会した龍馬は、おそらくその説に納得して門下生となつたようだ。海舟が後に「坂本は己を殺しに来た奴だがなかなか人物サ」(『水川清話』)と述べたこととも「概に否定はできない」。

文久3年正月月中旬、江戸に下る海舟と上京する土佐藩前藩主・山内容堂が、嵐から避難した伊豆下田で遭遇した。そこで、海舟は容堂に龍馬の脱藩罪赦免を乞い、受け入れられる。龍馬はそれ以降、海舟の下で神戸海軍操練所建設等へ向けた動きをスタートさせていく。そんな龍馬は家族に宛てた手紙に「今にては日本第一の人物勝麟太郎という人の弟子になり」「此頃は天下無二

の軍学者勝麟太郎という大先生の門人となり、ことの外かわいがられ候」などと、その嬉しさを隠していない。

特別展の見どころ

海舟の弟子となつた龍馬は「日々兼ねて思い付く所(海軍建設)に精を出している」と家族に報告している。本展では、龍馬に大きな教示を与えた海舟の考え方や動きを探り、その人となりを考えていく。海舟自身の海軍構想、海防論を踏まえ、資料を通じて海舟の実像に迫りたい。

この特別展を機に、宮内庁三の丸尚蔵館のご理解ご協力により、同館が所蔵する通称「エヘン」の手紙(坂本乙女宛、文久3年5月17日)の龍馬書簡複製を作成することができた。複製といっても伝統技術によるものであるため、真物と遜色ない資料である。これで、脱藩後国事に奔走し始めた龍馬書簡(乙女宛)の複製がそろい、脱藩後初の手紙(同年3月20日)、本書、「日本の洗濯」の手紙(同年6月29日)の流れが整った。複製であるがゆえに、龍馬の龍馬らしい手紙を常設展示してご覧いただくことも可能となったのである。

真物の龍馬書簡については、大村藩士・渡辺昇に宛てた手紙(慶応2年9月18日)、長崎・大村市歴史資料館所蔵を紹介する。また、海舟と深い交流のあった三重・

伊勢松阪の豪商・竹川竹斎(1809〜82)が著した「護国論」「護国後論」等を取り上げ、海舟の海防論へのつながりを考える。松阪には蝦夷地を熟知した松浦武四郎もいて海舟と交流している。武四郎や竹斎の感化を受けた海舟からの龍馬への影響は海防から蝦夷地開拓まで続いているように見える。その軌跡を辿ることが出来れば幸いである。

前田 由紀枝

今回、各地多くの博物館や個人の方に協力をいただきました。深く感謝とお礼を申し上げます。

(順不同)

■展示資料所蔵

東京都江戸東京博物館、神戸大学海事博物館、神戸大学附属図書館、琴平海洋博物館、横浜開港資料館(1)、大田区立山王草堂記念館(2)、松阪市松浦武四郎記念館(3)、大村市歴史資料館(4)、射和文庫(竹川家)、中濱家、岡田家、村上家ほか。出展数50件70点(部入替有)。

■「特別展図録」執筆者

星川礼忠氏(大田区立勝海舟記念館)、前田桂子氏(長崎大学)、白井拓朗氏(1)、黒崎力弥氏(2)、山本命氏(3)、山下和秀氏(4)。

*各方面の研究者の執筆によって勝海舟、そして龍馬の新たな側面を紹介しています。(頒価1,000円)

「龍馬最後の帰郷―坂本家と川島家・中城家―」展を振り返って

龍馬は大政奉還の20日ほど前に、最初で最後の帰郷を果たした。帰郷した龍馬が最初に向かったのは、種崎の中城家で、龍馬は旧知の中城家で心身を休めたのち、土佐藩の方針を変更させる大勝負に向かった。この中城家は、近所だった川島家とともに少年期の龍馬に大きな影響を与えた家である。

本展では、中城家や川島家が龍馬とどのような繋がりがあったのかを紹介するとともに、龍馬が最後の帰郷で果たした役割を考察することを目的とした。また、この時龍馬が休息を取った中城家の離れは、150年以上経った現在も当時のままで残っている。しかし、この離れは老朽化が進み、すぐにも修復を行う必要がある。そのため、本展はこうした中城家の現状を知っていただくことも目的の一つであった。

現在、高知市上町にある坂本家跡から種崎の中城家までの距離は、約11kmある。当時は交通手段が発達していないため、坂本家の人々が種崎へ行くには小舟を利用していただけと考えられる。小舟で鏡川を下り、浦戸湾を南下して行くと、左手には種崎の御船倉があり、右手の粕近辺には藩主の御座船が停泊していたはず

だ。そして、種崎浦周辺には水主や船大工、商人など船に関わる人々の町が広がっていた。現在でも浦戸湾の東岸には造船所があつて、御船倉の面影を感じることが出来る。

中城家は廻船御船頭の家で、その近所には廻船問屋の川島家があつた。少年期の龍馬の明確な資料は残っていないが、龍馬は「ヨーロッパ」と呼ばれるほどの西洋通である川島猪三郎から世界地図を初め、長崎から持ち帰った珍しい物を見せてもらい、中城助蔵からは操船技術や船の仕組みを教えてもらったのではないだろうか。

龍馬がのちに組織した海援隊は、海軍兼海運会社で、世界を目指した会社でもあつた。海援隊の事業は、まさに川島家や中城家の仕事そのものである。通常、海援隊の発想や世界への憧れは、ペリー来航後に、画家の河田小龍を通じてジョン万次郎の漂流話を聞いたことがきっかけだと考えられている。しかし、少年期から川島家・中城家と繋がりがあつたことを考え

ると、この両家こそが龍馬の行動や思想の原点ではないだろうか。

現存する中城家の離れは、ご子孫が管理を行っているが、老朽化が進み、個人で管理をするには限界に達している。高知市は昭和20(1945)年7月4日に空襲を受けており、龍馬が実際に足を運んだ場所が残っているのは、高知市北西部の柴巻にある田中良助邸と、この中城

家の離れの2か所だけである。田中家は史跡に指定されて修復・保存されているが、中城家は史跡指定の検討がなされたものの見送りととなり、現在も指定をされていない。

私は、この中城家の離れを後世に残してほしいと考えているため、企画展を出発点として、今後も中城家離れの保存に力を尽くしていきたいと考えている。

三浦夏樹



中城家離れ



中城家離れで龍馬が眺めた襖

11月行事 ふりかえり

11月は、ご存じの方も多いと思いますが、坂本龍馬が生まれた月であり、同時に亡くなった月でもあります。そうしたことから、11月は「龍馬月間」として、高知市内はもとより、県外でも記念行事を行う地もあるようです。

そして、龍馬の誕生日であり落命の日である11月15日は、高知県立坂本龍馬記念館の開館記念日でもあるのです(平成3年に開館しました)。こうしたことから、当館にとって11月は特別な月であり、様々なイベントを行いました。

■龍馬まつり in 記念館(11月13日)

毎年11月15日に近い日曜日に、桂浜公園では「龍馬まつり」が開催されます。10月下旬に桂浜公園の商業ゾーンの一部がオープンし(グランドオープンは来年3月の予定です)、ステージイベントも行われていました。当日はあいにくの雨模様でしたが、当館もPRタイムに参加し、〇×クイズ大会などを行いました。

館内では、企画展などの開催に加え、お客様から再開のお声が多かった、龍馬の文字で名刺をつくる「名刺づくりコーナー」の復活や、当館オリジナルの重ね押しスタンプなど、手軽にお楽しみいただけるコーナーを設けました。

今年は、高知在住の映画監督・安藤桃子さんたちを中心に行っている「龍馬祈願祭」に協力し、来館者のみなさまに、夢やメッセージをコースターに書いていただくコーナーも設けました。コースターの願いは15日に桂浜の龍馬像前で若宮八幡宮の宮司様の祝詞とともに奉納されました。

■開館記念日(11月15日) 無料開館しました。

■「第13回長宗我部フェス」参加&「長宗我部フェス in 浦戸」(11月19日、20日)

当館が立地する場所は、かつては土佐を代表する戦国大名・長宗我部氏の最後の居城である浦戸城があった地です。そうしたことから、南国市岡豊山の県立歴史民俗資料館を会場に開催される「第13回長宗我部フェス」(以下、フェス)に参加し、関連企画として「長宗我部フェス in 浦戸」を行いました。

11月19日のフェスに当館はPRブースを出店。オリジナルグッズや企画展小冊子を販売した他、「龍馬まつり」に引き続き)〇×クイズ大会で会場の皆様に楽しんでいただきました。

翌20日は当館での「フェス in 浦戸」です。前日のフェスに参加されていた、土佐長宗我部鉄砲隊と豊後大友宗麟鉄砲隊の火縄銃や大筒(どれも本物です)による演武を八策広場で開催しました。轟音に驚かれた方も多かったようです。また、県立埋蔵文化財センターの松田直則所長のご案内で浦戸城跡をめぐるウォーキングツアーや浦戸城跡から出土した遺物の特別展示など、浦戸城にフォーカスしたイベントを行いました。



■スタンプラリー参加

スタンプを集めると素敵なグッズがもらえるスタンプラリー。当館も11月から3つのスタンプラリーに参加しています。

浦戸城跡に立地することから「長宗我部元親 RALLY FINAL」と「土佐城さんぽ御城印ラリー」、龍馬つながりで東京都品川区・福井県坂井市・高知県の3者で共催する「ハタチの龍馬 スマホでつながり旅スタンプラリー」の3つが始まりました。

それぞれ、期間や条件が異なりますので、詳細はそれぞれのサイトでご確認ください。



公式 SNS で情報発信しています!
フォローをお願いします!



Facebook



Instagram



Twitter



YouTube

龍馬の手紙

17

新国を開き候ハ積年の
思ひ出ニ候間、何卒一人
でなりともやり付け申
べくと存居申候

(慶応三年三月六日付 印藤幸宛)

竹島(鬱陵島)開拓、そして北海道開拓への思い。その実現に向けて長府藩の協力を求めた印藤幸宛の手紙には、龍馬の巧みなセールストークが見え隠れする。

売り込みが始まるのは、一つ書きの「第三段」からだ。まずは、長府藩家老の三吉周亮が興味を示したものの、その後返答がないとして泣きを入れる。次の段(「第四段」)で、その弱気から一気に反転し、志とその実現に向けた凄まじい決意を述べる。前段の言葉が作用して、より効果的だ。さらに、同段で、下関の大年寄伊藤助大夫(九三)が、本事業に賛同しているとの話を出して、「バンドワゴン効果」を期待。これに続けて、大洲から船を借用する予定を示し、その期日が迫っ

ていると記す。当該計画が口先だけではないことを証すると同時に、相手の焦燥感を掻き立てる。

続く「第五段」で、多忙な相手方への気遣いを、「第六段」で当初の予定を絡めながら、自身の近況に触れ、「第七段」で売り込みを再開。事業計画には必須の詳細情報がここで示される。萩藩士井上聞多(馨)を出して、数値の信憑性を高めていることも見逃せない。「第八段」では、「以前より約定せし」人物をチラつかせて、さらに焦燥感を煽る。

「第八段」の後半から「第十段」にかけては、長府藩に求める具体的な協力手法を、難易度に従って段階的に提示。これは「ドア・イン・ザ・フェイス」(譲歩的要請法)にも、「ゴルドイロックス効果」を狙っているようにも見える書きぶりだ。無論、後者については、選択肢が四つ以上あるから効果は薄いが...。そして、最後の最後に夢を語って締めくくる。

事実と思いを語っただけだろうが、少し変わった角度から眺めると、龍馬の説得スキルが示されているようで、興味深い。

古城 春樹

下関市立歴史博物館 館長

当館や高知観光などについて日常寄せられるさまざまな質問と、その答えを職員がリレーでご紹介します。

Q&A

No.2

スマホで気軽に
展示解説

Q. 音声ガイドはありますか？

A. 現在休止中ですが、ご自身の端末で聞くことができます。

「ガイドさんはいませんか？」とお問い合わせを受けることがあります。あいにく龍馬記念館にガイドの方はおりません。2018年のリニューアル時より、タブレットを使用した音声ガイドをご用意しておりましたが、コロナの影響により現在は休止中で、お客様にはご迷惑をおかけしております。タブレットの貸出しは行っていませんが、お客様ご自身のスマートフォンやタブレットを解説用のWi-Fiに接続していただく常設展示室の約50点のパネルや資料の解説を聞くことができます。日本語のほか、英語、中国語(繁体字、簡体字)、韓国語、タイ語に対応しており、外国からお越しのお客様にもよくご利用いただいております。右の写真のように、解説横の青で囲んでいるタブレットのマークが目印で、その番号を入力すると解説を聞くことができます。また、美術館・博物館解説アプリ「ポケット学芸員」でも写真の赤で囲んでいる番号を入力

すると言語は日本語のみですが、常設展示室の約20点の資料の解説を聞くことができます。あらかじめアプリをダウンロードし、当館を選択した上でご利用ください。

解説を読んでいると頭や目が疲れてきますので、耳で聞くことで、展示資料を集中してご覧いただけます。



時間にゆとりがある場合などは、音声ガイドを活用して見学していただくのも有効ですので、是非ご利用ください。

小島 千穂

令和4(2022)年10月、高知空港のすぐ南西にある南国市立スポーツセンター横に、国内最大級の津波避難タワーが完成した。収容人数は820人で、最大津波予想は4.4mに対して、屋上は約2倍以上の高さの10.5mとなっている。

南海大地震は、約90〜150年の周期で繰り返して起こっており、その度に高知県は地震と津波の被害を受けてきた。前回の南海大地震は昭和21(1946)年に起きており、既に78年が経過している。気象庁地震火山部によると、次の大規模地震が今後30年以内に発生する可能性は70〜80%だそうだ。

昭和の南海大地震の一つ前が幕末で、嘉永7(1854)年に起きていた。ペリー来航の翌年で、龍馬が20歳の時だった。このように周期的に起こるとはいえ、その間隔の長さから、生涯で2度体験する人は少ない。そのため、高知県の海岸線では、様々な場所に地震・津波の様子が石に刻まれて伝えられている。紙に記録しても年月が経つと忘れられてしまい、見る人も限られる。しかし、100年後も避難場所となるような所に石碑として残しておく

ば、避難してきた人が必ず読むと考へて、注意書きを残してくれた先人の貴重な遺産である。

高知県の海岸線には、命山と呼ばれる山が多くあり、津波の時に避難場所となっていた。冒頭の高知空港周辺には、現在小高い場所はないが、昭和17(1942)年に軍の飛行場を作るまでは、三島村に久枝山という命山があった。その山を削り、三島小学校なども立ち退かせて飛行場を作った。そして、戦後には軍の飛行場をさらに拡大して現在の高知空港ができあがった。空港と海の間には住宅地があるため、久枝山の代わりに津波避難タワーが必須の地域で、これまでに9カ所の避難タワーが作られている。

また、空港のある南国市の東には香南市があり、香南市夜須町にも命山がある。本来の山の名前は観音山で、現在も地震の時の避難場所に指定されている。その山頂には、高さ160cmほどの自然石があり、嘉永7年11月5日に起こった南海大地震の津波に関する文章が彫られている。

石碑には当日の異常気象や、津波の被害が記されており、津

波は3度目の波が最も大きく「宝物家に残すも再び家に帰るべからず。是必ず必ず肝要なり」と注意を促している。



観音山の津波地震碑

ちなみに当時は、大地震が起きたことを受けて嘉永から安政に改元となった。11月もあわずか、という時期での改元で、土佐の人は

「安政(安静)にしても地震は止まぬなり
こんなことなら嘉永(替い)でもよい」

という狂歌を残し、余震が続く不安と苛立ちを表した。

先日、11月16日から18日には、日本博物館協会主催の全国博物館大会高知大会が開催された。その3日目がバスツアーで、コースを設定して県内各地の博物館等を巡った。その中の一つ、中央部コースでは、香南市赤岡町にある津波避難タワーを、香南市防

災対策課のご協力により見学させていただいた。東荒地区にある避難タワーは、海岸のすぐ近くにあるタワーで、高さ19.8mある。



香南市赤岡町東荒地区津波避難タワー

こうした津波避難タワーの多くは、東日本大震災以降、急速に建設されたもので、高知空港のように、開発によって避難場所がなくなった所や、赤岡町のように元々避難に適した山やビルが少なかった地域に多く建設されている。

高知出身の物理学者 寺田寅彦は、『天災と国防』という著書の中で「文明が進むほど天災による損害の程度も累進する傾向がある」と述べている。空港は現代の私たちにとって、必要不可欠な存在であるが、高知空港は周辺地域の人たちの命山を削ってできた場所であった。その近くに全国でも最大級の津波避難タワーができたことは、大変良いニュースとして私は受け止めた。

ミュージアムショップ便り

当館には、「龍馬を知るため」「学ぶため」「高知県の観光スポットの一つとして」等、様々な目的を持った方がご来館くださいます。本館出口に位置するミュージアムショップでは、館を出る間際までそれぞれの方に余韻をお楽しみいただけるよう、企画展の図録や幕末関連の書籍、オリジナルTシャツやマグネット、土佐和紙を用いた商品等幅広い品揃えを心がけています。

今回は、数ある自慢の商品の中から、個性豊かな2点をご紹介します。

是非、来館いただいている事をイメージしながらご一読ください。

まずは、当館オリジナル「リバーシブル前掛け」

坂本龍馬とジョン(中濱)万次郎。同じ時代を生き抜き、今なお現代の人々に大きな希望を与え続けている高知出身の偉人2人が描かれた表面。裏面には、“Let's Go! Hand in Hand”という力強い文字と共に固く結ばれた手がデザインされた「リバーシブル前掛け」です。しっかりした厚手の生地は、使い込むほどに柔らかくなり、使う方の体にフィットしてきます。



リバーシブル前掛け 3,000円(税込)

産地である愛知県豊橋市で、100年以上前に作られたトヨタ製の織機を使って製造されているこだわりの逸品!江戸時代から続く商人の象徴「帆前掛け」で、身も心もグッと引き締めて新年度を迎えてみませんか?



前掛け 製造工場の様子

2目にご紹介するのは、嬉しいワンコイン価格の「マイクロファイバークリーニングクロス」



マイクロファイバークリーニングクロス 500円(税込)

超極細繊維生地からつくられた特殊な布にデザインされているのは、龍馬の紋服紋章、組み合わせ色に桔梗紋。携帯電話や眼鏡のお手入れ等、日用品の一つとして幅広くご利用いただけます。色も5色とバリエーションが豊富なので、使う方をイメージしながら選ぶのも楽しみの一つになるのではないのでしょうか。新年早々、拭けば拭くほど福が来るかも!?



当館では、ミュージアムショップのみのご利用も歓迎いたしております。桂浜周辺にお越しの際には、是非気軽にお立ち寄りください。スタッフ一同、皆様のご来館を心よりお待ちしております。

野村 瑞穂

■「龍馬ゆかりの風景と当館職員がそっとすすめる名所」展と龍馬月間の特別展示

海に見える・ぎやうらいでは企画展「龍馬最後の帰郷-坂本家と川島家・中城家-」展の関連展示として11月1日より「龍馬ゆかりの風景と当館職員がそっとすすめる名所」展の開催に加え、龍馬月間から「浦戸城跡から出土した遺物」を特別展示しています。

「龍馬ゆかりの風景と当館職員がそっとすすめる名所」展では、高知市の浦戸湾周辺にある龍馬ゆかりの名所旧跡と当館の職員がおすすめる風光明媚や伝説的な名所など15ヶ所を、写真パネルと特大地図で紹介しています。

浦戸湾内の西岸にある^{たもとし}「袂石」は、龍馬が最初で最後の帰郷の折に、芸州藩船・震天丸をこの近くに停泊させた場所で、その後対岸の種崎にある中城家で休息をさせてもらったそうです。また、「^{ほらみ}孕のジャン」と言われる場所は、西側が「孕西町」、東側が「東孕」という地名で、浦戸湾の山が東西からせり出してきて湾を狭くしている部分があります。この狭くなった場所では、静かな夜に小舟を出して漁をしていると、小銃を遠くで撃ったかのような「ジャン」という音が鳴るようで、その音がすると魚はまったく捕れなくなるという怪異現象が昔から何度も確認されています。高知出身の物理学者・寺田寅彦は、地震によってできた孕の地形が関係しているのではないかと推測しました。このほか「よさこい節」の歌詞にもなっている浦戸湾に面した漁村「御豊瀬」、全国でも珍しい「海の県道」といわれる種崎と御豊瀬をおよそ5分で結ぶ「高知県渡船」の待合所風景、そして壮大な「浦戸大橋」など。

高知県民にも親しまれる浦戸湾周辺の自然豊かな歴史と風土を感じられる場所を、皆様も一度訪れてみてはいかがでしょうか。

県道から当館につづく道は登り坂になっています。お客様はこの坂を登ってご来館いただくのですが、坂道の終わり付近、左手に小さな丘があります。丘の北側、南側にそれぞれ階段などがあり、登ることができますが、これが浦戸城の天守台跡です。近隣には石垣も保存され、また当館の南側の遊歩道を下りると堀切の遺構も残っています。こうした史跡や遺構を眺めると、当館が立地する場所がかつて浦戸城があった地であるということがリアルに感じられます。

この浦戸城跡から出土した、瓦類の破片などを県立埋蔵文化財センターから特別にお借りし、本館「海のみえる・ぎやうらい」で展示しています（令和5年1月19日まで）。豊臣政権と長宗我部氏の関係にも関係する桐紋瓦など、非常に貴重な資料も展示しています。周辺の史跡、遺構とあわせて、浦戸の歴史にも思いをはせていただきたいと思います。（浦戸からの出土遺物は県立埋蔵文化財センターに、長宗我部氏については県立歴史民俗資料館に詳しい展示コーナーがあります。ご興味を持たれたら、そちらも一度お訪ねください。）



中村 昌代・河村 章代

入館状況

2022年12月20日現在

(1991年11月15日開館以来 31年36日)

◆入館者数 4,499,470人

■リニューアルオープン(2018年4月21日)以来 562,710人

編集後記

新年を迎えました。元日を含め、長らく年末年始を休まず開館してきた当館ですが、本年1月1日は設備メンテナンスのため休館することになりました。ご来館を予定されていた皆さまには大変申し訳ありませんが、1月1日を除いた年末年始は開館しております。ご来館をお待ちしております。

今年度最後の展示は、特別展「龍馬の師-勝海舟生誕二百年」展です。土佐の郷土の家に生まれた龍馬と、幕田である勝海舟の間に生まれた、幕末ならではの「縁」に思いをはせていただければ幸いです。(か)

館だより「飛騰」第124号(年4回発行)表紙題字：書家 沢田 明子氏

発行日 2023(令和5)年1月1日

発行 公益財団法人高知県文化財団

高知県立坂本龍馬記念館

〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015

http://www.ryoma-kinenkan.jp

「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休

入館料 一般500円(企画展開催時700円)

高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。

〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで